

ワタシ的帰納法



半分だけ

昨日はワールドカップ準決勝だった。

岡田ジャパンの快進撃に、日本中が熱狂。誰しものが諦めていた今年の日本勢は良い意味で期待を裏切り続けていたのだ。テレビでも雑誌でもサムライJAPANの青色がここぞとばかりに目立っていた。

—私はというと、明るい部屋の中で、そのざわめきを感じていた。サポーター達の大きいアクション、解説者の絶え間ない声。

しかしその音は私の耳をすりと通り抜けて、空気に同化した。

少しテレビ画面を気にしながら、問題集のページをめくる。かさり、と乾いた音を立てて新しい図形が並んだ。

午前0時。

普段ならもう眠っている。が、今日だけはそういうわけにはいかないのだ。

無論、ワールドカップを見るためでもある。

しかし明日提出しなければならない、この分厚い問題集のためだと言った方が正しいだろう。

幸い、あと2ページ。50ページ近い提出範囲をようやく終えそうなところまでこぎつけ、私の気分はいささか華やいでいた。

長かったなあ、なんて思う。

こんなふうに、数学を解いている間、いつも私は1つだけのことを考えるのだ。

藤間先生、と。

彼は私の数Ⅱの先生だ。

何を考えているのかさっぱり解らない、良く言えばクールな男。悪く言えば、ただの変人だけど……。

はじめは興味がなかった。

だけど彼のかもしれない不思議オーラに、それはもう、必然的に惹きつけられてしまった—
そもそも、私は不思議な人に対するアコガレがあるのだと思う。

自分でもよく解らない、だけど。アコガレ、きっとそんなものだ。

いや……どう表現すればいいのか、ただ、もう、

私は彼のことを。

認めたくない気持ちを断ち切るためにテレビの電源を切った。すると急に静かになって、何故か少しだけ寂しい。

最後の問題を解き終わり、ため息をつく。

指先をなんとなく眺めていると、今まで気がつかなかったが、親指の爪が割れていた。

割れた部分をいじりながら、明日のことを想った。

明日は月曜日。

1時限目は数Ⅱ。

やっぱり少し華やぐ気持ちを抑えるために、ベッドに腰を下ろして携帯のアラームをセットした。
ピッ、と完了の音が鳴ると、電気を落とす。

実を言うと、最後から2番目の問題は解けなかったのだ。
明日質問に行こう、と思いつき、顔がにやけてしまう。彼は何と言うだろう。
また、口の片端で笑うだろうか。呆れたように笑うのだろうか。
彼の字を思い出す。少し小さめで、丁寧な字。黒板に几帳面に並ぶ。

なんだか幸せだった。すごく。
ただ思い出したただけだ、それなのに、顔の緩みがとめられない。さっき見た、対数関数のグラフの漸近線のような感じ。
限りなく、近づく。だけど一致することはない。
交わることはないのだ、ただ、近づくだけ。
何も生まれない。解なし。
だけどそれは居心地のよい「無」だった。
窓から淡い明かりが漏れる。
それを見つめているかのような気持ちだった。
彼の淡々とした声が脳に響く。
「限りなく、近づくんです」
「だけど交わらない」
そのあとに笑う。一片端で。

私の心も、ちょうど半分だけ—
彼のことを想うことにした。

いとおいしい

—おはようございます。

突然の声に少し身構える。あの声だということには気がついてはいたけれど。

...おはようございます。控えめな声で返してから、なんだか嬉しくなる。

昨日わからなかった問題を教えてもらおうと、職員室に向かっていたところだったのだ。こんなところで出端をくじかれるとは—良い意味だけど。

「先生、解らない所があって」

先生、という呼び名がくすぐったい。実は彼は臨採で、まだ23歳なのだ。

「じゃあ、うーん、ちょっと待ってね」

いつもの淡々とした口調で言う。待ってね、というフレーズに不覚にもきゅんとした。

しかし平静を装う。対抗意識で淡々と—彼には敵わないけれど。

荷物置いてくるから、と歩き出す先生。私はさりげなくその後姿を見つめた。

小走りで教員用更衣室に向かう彼。決して高くない身長に、学生っ気が抜けない髪型。しわくちやのYシャツ。

なんだか間抜けな先生の「部分集合」。

だけど「全体集合」が先生だから、なんだか全部、いとおいしく思えてしまう。

「すみません」

少し汗をかいた先生が目の前に現れる。私は目をそらした。

「そんなに急がなくても良かったのに」

ちょっと無理をして、おどけた調子で言う。

「だって、待たせてるのに悪いじゃないですか」

丁寧な敬語で言う先生。照れ隠しなんだろうか。この人は誰に対しても、平等に敬語を使う。

だけど—

「じゃ、自習室行こうか？」

時折混ざるタメ口には、なんだか、隠し味としてカレーに入れた蜂蜜のような・・・そんな甘さがある。

「はい」

その甘さを大切に味わうように、そっと返事をした。

自習室は近い。もう少し遠い方が良かった、なんて変かな、と思う。少しでも多く、一緒に歩く時間が欲しかった。

いつもは授業だけだから—こんな展開は喜ばしい。甘口カレーだな、と思って1人で笑う。

自習室に入ると、すぐに窓際の席に座った。先生は、その前の席。

ガラガラ、と椅子を引く音が何故か耳に残る。

「えっと、この問題なんですけど」

淡いピンクの付箋がついたページをめくる。

「ああ、三次関数ですか」

小さく声を出して、先生は私の顔を見た。とっさに視線をそらして、先生の手元を見る。

なんだか、呼吸ができなくなりそうだ。女子高生には酸素ボンベを持ち歩くことを義務づけるべきなんじゃないか、なんて考えて必死に心をそらす。

「これはですね、まず微分して—グラフを描いて $y=a$ との交点を探してあげるんです」
そんなことを言いながら、私のシャーペンを握る。

もう、このシャーペンは絶対に捨てない。

私は心の奥で、そっと決めた。

ジュリアン

先生が問題と向き合ってる間。

私には少しだけ時間が与えられた。まじまじと彼の顔を見つめる—やっぱり好みの顔だ、と、思ってしまう。

細めの目に、少し長めの睫毛。小さな口、ピック型の顔—

「佐藤さんは」

突然名前を呼ばれて、心臓が止まりそうになる。(佐藤さん、とは私のことだ)

・・・女子高生はAEDも持ち歩くべきなの？

どぎまぎしたまま、はい、と答えると先生はふっと顔を上げた。

「何か楽器しますか？」

この人が、私に興味を持っている！と、考えただけで—悔しい、けど。すごく嬉しい。

「すこし、アコースティックギターを」

私が答えると、先生は穏やかな顔になった。

「ああ、いいですね。好きです」

・・・好きです、か。やっぱり反応してしまう。

「先生は？」

聞き返して欲しいんだろうな、と思い、笑顔をつくって訊く。

思ったとおり、先生は笑顔になった。一片端だけで、じゃなく。満面の笑顔だった。

「俺はベース」

一人称は俺、だっけ。さらに細くなった目を見る。

「ベース、いいですね」

真似をして答えた。けど、そんなことには興味がなかったようだ。

彼は大きな笑顔で自分の「相棒」について語った。

音がいい、質感がいい。大学1年のときに買った。名前はジュリアン(?)—

まるで彼女のことで話すかのような顔だった。

・・・なんだか、妬けてしまう。

キーンコーン・・・

「あ」

声が同時に出て、なんだか嬉しくなる。

「予鈴ですね。すみません。話しすぎてしまいました」

いえ、と答える。

もっと話したかった。

「ありがとうございました。・・・また、話しましょうね、ジュリアンのこと」

私が言うと、先生はニヤリと笑った。

きゅうっ、と心が鳴る。こんな感覚は久しぶりだ。

だって、きっと先生のことを気に入ってる生徒なんて大勢いるだろう。

だけど私だけだ。

ジュリアンのことを知っているのは、きっと私だけ。

迷路

シャーペンを、握る。

いつも使っている柔らかいグリップのシャーペン。これを買ったのはいつだろうか—と、考えてみても昔のこと過ぎてもう思い出すことも出来なかった。

でもこれを握っていると何故か安心する。この前の彼の体温が残っているような気がしているからだろうか？

「沙裕未」

教室で、ただポーっとシャーペンを見つめる私に、裕希が話しかけてきた。裕希というのは、今年に入ってから仲良くなったクラスメイト。高2ともなると、友達を作るのなんて序の口になってきていた。裕希との最初の会話なんて、

『名前が一文字一緒だね！運命かも』

—だ。

「裕希・・・どうかした？」

何事もなかったかのように、持っていたそれをペンケースにしまう。

「今日の生物、2組でやるって」

クールに言い放つ裕希。コイツの口から運命なんて単語が出たとは思えない。

「超事務的・・・。そこに愛は無いの？」

横目で睨むと、肩をすくめて顔を緩めた。

「愛しか無いよ」

今度はひどくロマンチックな言葉を吐く。・・・つかめない奴。

裕希はいつもこんな調子だ。だからこそ私は彼女のことを好きだし、二人でいるのはとても落ち着く。

だけど誰にも、先生のことは言えなかった。たとえ裕希であっても—。（そもそも、裕希は先生のことが気に入くないらしい）

裕希が立ち去ろうとしてから、思い出した。

「あ、ねえねえ」

私の声に戻り裕希。

「進路調査、出した？」

高2といえば、進路のことが話題の80%を占める時期。こんな会話、1日に何十回聞くだろうか。

「あー・・・まだ」

あからさまに嫌な顔になる裕希。まだ迷っているらしい。

「明日まででしょ」

「そうなんだけど。何がやりたいのか、分かんないから。親にも何も言ってないし。あたし、何になればいいと思う？」

一気に口を動かす裕希を見つめる。そんなの知るか、と思う。

「さあ・・・。大学は行くよね？」

流石に進学校だ。大学進学以外は風当たりが強い。

「まあね、そのつもり。まだわかんないけど」

「はっきりしないなあ・・・」

「沙裕未とは違うよ」

何が違うのか、と心の中でツッコミを入れる。何も違わない。私だって迷っているのだ。

ただ、その迷いよりも彼のほうが頭の大部分を占めている、というだけで。

裕希は今度こそ立ち去った。早歩きで。

どうしようか、そんな思いで見つめる。あそこまでキツパリと、したいことが無いと言えたらどれだけ楽なんだろう。したいことがあるってキツパリ言える人にも訊いてみたい。

それは本当にしたいことなのか？

「したいこと」「本当にしたいこと」の基準はどこにあるのか？

どうすれば間違えないのか。後悔しないのか。

進路集会を開くのなら、まずそこから教えて欲しい。私たちは、まだ子供なのだから。

ぶ厚くなったファイルから『進路希望調査』とゴシック体で書かれたプリントを取り出す。・・・

・明朝体の方が温かい気がして好きだ、と、どうしようもない苦情を思いつく。

私も裕希と全く変わらない。まだ迷っている。

いや、迷っていない時なんて無いのではないか？

思春期の私たちは、日々迷路の中で過ごしている。

終わりは何処に？

・・・『わからない』。

曲線模様

『わからない』のは、恋愛に関しても、同じなのではないか？

好きなのか、好きでないのか・・・。

その境界線はあまりにも曖昧で、複雑だ。

裕希と並んで歩き、くだらない会話をしている間も二人の心はどこか宙ぶらりんで、情けないような、苦しいような、そんな気持ちになっていた。

「あ、藤間」

裕希が嫌な声を上げた。どきっ、とする。誰か、誰か、AEDを—

「こんにちは」

先生が涼しい顔で言い放つ。裕希は軽く会釈。私は挨拶。

「背、低っ」

明らかな悪意だ。

「聞こえるって・・・」

裕希を小突く。でもなんだか、聞こえて欲しい。・・・先生の怒った顔も見てみたいから。

生物の時間も、裕希の机の上には『進路希望調査』。

私の頭の中には『わからない』—減数分裂のことなんか、一切頭に入ってこなかった。

1つの考えから、まるで娘細胞が出来るかのようにポンポンと新たな考えが生まれる。「思春期症候群」とでも言うべきだろうか。何とかっていうバンドの曲で、そんなタイトルのものがあつたような気がする。

裕希は相変わらず心ここに在らずといった様子で、一心に下を見ている。話しかけるな、ということだろうか。

それならば、と私も下を見る。まるでお通夜みたいじゃないか。

高校生って嫌だ。

何もかも。こんな風に悩んで、或いは呻いて、ある時には泣きわめいたようなことも・・・

いつかは忘れてしまう、それが「若かった」の一言で片付けられてしまうのなら。

こんな一瞬一瞬を、全て一まとめにして麻紐でくくり上げてしまいたい。

それで、燃えるごみの日に出す。資源ごみには、できないだろうから。

そんな破滅的な考えに陥ったとき、ふとジュリアンを思い出した。吹き出しそうになってしまう。

ジュリアンは良いな。

そんな風に考える私は可笑しいだろうか。ベースのジュリアンを羨む私は。

彼女は、先生に弾かれて美しい音を出し、丁寧に磨かれて、先生の部屋で横たわって、或いは大事に立てかけられているんだろう。

なんて羨ましいジュリアン。でも彼女は言葉を話すことは出来ない。

しかし先生にとって大事ななのはそんなことではないだろうから。

ジュリアンは生まれながらにして、先生の相棒なのだ—

・・・三次関数だ。きっと世の中全て。
本当に唐突に、そんな結論が生まれた。
この世の中の、ありとあらゆる紆余曲折。
全てをつなげたら、きっと三次関数だ、と思うのだ。先生が描いたあの曲線。
最初が上がれば、最後も上がる。
最初が下がれば、最後も下がる。

きっと初めから、すべての運命は決まっているのだ。予定調和。

・・・きっと、それでいいのだ。

希望

今日は進路希望調査、提出日。

でも、いつもと何ら変わりなく1日が始まった。

おはようございまーす、が流れ落ちる校舎内。まるで大きな音の渦の中。

私は独り、考え込んでいた。片手には大学案内。

わけが解らなかった。知らない間に事が進んでいて。気がついたらもう猶予なんて無い。行き止まりだ。

ふと窓に目をやると、無数の水滴で濡れていた。いつの間にか、雨が降り出していたんだ。

不規則な雨音。次第に大きくなる。大きくなって、弾ける。

—もしかしたら、雨は、世界中の人々の涙が貯まって

溢れて、空からこぼれ落ちたものなんじゃないか。

だとしたら、あの雨はきっと・・・塩味だ。

窓を開ける。ガラリ・・・雨水に触れる。ぬるかった。

そっとその指を舐める。

「何してるんですか？」

心臓が飛び跳ねた。あの声だ。

「先生・・・」

彼は怪訝な目で私を見ていた。1 m先。すぐに届く距離。

「雨は」

言いかけて、やめる。

「・・・どうしてここに？」

先生がこんなところに居るなんて。（先生も自習室を使うんだろうか？）

「なんとなく・・・明かりがついていたので」

私と同じ理由だった。

私も今朝、早めに登校し—たまたま明かりがついていた、この教室に立ち寄った。希望欄を、埋めるために。

「今日は・・・雨で・・・」

なんとか言葉を繋ごうとした。だけど上手くいかない。代わりに、沈黙が空気を紡いだ。

先生が静かに私の手から紙を奪う。

「見ないで下さい」

奪い返そうとする私に、片端だけで笑って言う。

「真っ白じゃないですか」

「・・・今から書くんです」

嘘ではなかった。今から書くのだ。何処でも良い。誰にも文句を言われぬような学校を。

「行きたい学校を書いたほうがいいよ」

真剣な目になって言う先生。

「こういうの、一つ一つが意外と大切だったりするから、ね？」
同意を求めるように私を見つめる。何故かすごく恥ずかしくなった。

「・・・でも」

その先は、浮かばなかった。

先生に見つめられると何も言えない。弱い私だ。でもその弱さが、自分でも嫌いではないのだ—
—困ったことに。

ただ、思うのだ。

大切なものなんて、無い。この感情1つだけ。これさえ守ることが出来れば後はもう、どうにでもなってしまうがいい。

しかしやはり、この気持ちさえも宙を舞った。

先生が小さく手を振って出て行く。

私は手を振り返すこともせず、白紙のままの『進路希望調査』をじっと見つめた。

—やっぱり、ゴシック体は嫌いだ。

そんなことを、また考えた。

季節風

1 時限目は地理だった。

「えー、この季節風の影響で一・・・」

なんだか、気象予報士みたいな話だな、と思いながら。口の中にはイチゴ味のガム。

ついさっき、進路希望調査を出したところだった。裕希は相変わらず適当に書いて出したらしい。

私は、というと。

ちゃんと考えた。考えたのだが、何も思いつかなかった。ただ、生物の『ゲノム』の話だけは面白く思えたから、有名大学の理学部、生命科学を選んだ。

でも、それほど行きたいわけではない。

「さゆ、さゆ」

後ろから聞こえる小さな声。

「何、はるちゃん」

後ろの席の「はるちゃん」。本名は、何だっけ？

「教科書貸してっ」

良い度胸してる、と思いながら渡す。どうせ開いてさえいなかったのだ。

人生も、貸し借りができたらいいのに。

私の、「開いてさえいない」人生。誰かに貸してしまいたい。例えば、2年前に死んじゃったじいちゃんに、とか。

いっつも言ってた。まだやりたいことがたくさんあるって。確かに、じいちゃんはまだ70歳だった。

予想もしていなかった突然の死に、親戚中が泣いた。

多分、私が死んでもこんな風にはならない。じいちゃんは凄い、彼のお通夜で本当に思った。じいちゃんに、伝えてあげたかった。じいちゃんは、凄いねって。

「佐藤」

地理担当の、大上先生。(通称、オオカミ)

「この山脈名と、吹き付ける季節風は？その影響は？」

あーあ、と思う。

「えーと」

教科書は、はるちゃんが持ってる。

あ、そうか。

教科書なら、貸しても返ってくる。大体は。

だけど人生はどうだろう？返ってくるのだろうか？

もし返ってこないのであれば、何処にいくんだろう？

じいちゃんは140歳まで生きるのだろうか？

・・・じいちゃんは、先生に恋をするのだろうか？

そうであればいい、と、躊躇い無く思った。

私の人生の中の最重要パートは、それでもう果たされるのだから。

—そうすれば私自身は季節風の影響なんて、受けずに済む。

「おい、佐藤」

唐突に呼ばれて振り向く。まったく、心臓に悪い。寿命が縮まったらどうしてくれるんだ—、と心の中で愚痴った。

「なんですか？」

あからさまに嫌な態度で接する。私の担任、山口明良は少しひるんだ。しかしこんなことで引き下がるような男でもなかった。だてに43年間、嫌な人間として生きてない。

「この前の進路希望だけどなあ・・・」

上目遣いで私を見る。キモチワルイ。言い方が古いかもしれないが、反吐が出そうだ。

「何か問題でも」

「いやあ、別にそういうわけではないんだけど・・・お前はこれでいいのか？」

「どういう意味ですか？」

遠慮がちな山口に、反抗的な私の態度。ありきたりな場面だ。

「いや・・・もう少し、大学のランク上げたらどうなんだ？」

やっぱりか、とため息をつく。だから嫌いなんだ。こういう奴ら、全員。

「結構です」

そのまま立ち去ろうとした。山口の汗ばんだ手が私の腕をつかむ。嫌だ、嫌だ、嫌だ！

「ちょっと待て」

「何なんですか！」

なんて不毛なやりとりだ。でも、コイツと過ごす一瞬一瞬がもったいなかった。きっと私の一生の中で『意味の無い時間』ベスト10に入るだろう。

「お前なら、きつともっと上を目指せると思うぞ？」

その一言で、血管が切れるかと思った。侮辱だ。私にとって、それは侮辱だ。

離して下さい！の代わりに、勢いよく手を振り払った。

「急いでのので」

早足で去る。大袈裟に掴まれたところを反対の手で払った。小学生みたいに。

もう、何もかもが腹立たしかった。あいつのニヤけた顔。まだ残ってる、汗ばんだ手の感触。キモチワルイ、キモチワルイ、キモチワルイ。

思い出すと涙が零れ落ちそうで、必死でこらえた。あんな奴のために水分を失ってたまるか。

通り過ぎりの掲示板で、提出物を確認するふりをする。・・・本当は、少し出てしまった涙を拭きたかったのだ。

指の先で念入りに目をこすった後、<数学科>という、なんでもない単語に目を奪われる。

新たな提出範囲。少ないから、今日じゅうに終わらせることができそうだ。

そう思ったら、心が晴れ晴れとした。アイツの手の感触なんて、消え去った。

何も残らなかった。ささやかな嬉しさ以外は。

・・・もし、私の心を微分してみたら。
きっと、先生しか残らないだろう。
いつまでも、そうであればいいと思った。

結局あの数学の課題は、一晩で終わってしまった。

考えたくなかったから。ほかの事を。

考え出したら、またアイツの薄ら笑いが蘇ってきて吐き気がした。

思い出すのを脳が拒んでいた。

・・・いつからだろう、ノートの端っこに、自分の感情を書くようになったのは。

口で言えない感情を。提出物だろうが、授業用だろうが関係なく。

書くことで、心を浄化するのだ。私の頭の代わりに、ノートが覚えててくれる。

その日のノートにはやっぱり「キモチワルイ」ばかりが詰まっていた、見ている気持ちのいいものではなかったけど。

でもなんだか、書いているうちにスッキリとした。頭が冴え冴え、そんな感じに。

そして、時は移って3日後。提出したノートが返ってきた。

周りからの「提出、早っ」という声は無視して、なんとなくパラパラとページをめくる。

数々の数式が、なんだか文章みたいになって並んでいた。

数学家の気持ちがなんとなく解る気がする。こういう羅列を見ていたら、何故か心が落ち着く気がするのだ。

無数に並んだ、数式。端々から溢れる、『キモチワルイ』。

最後のページにたどり着いた。検印、と、文字—

『大丈夫ですか？』

たった、それだけだった。

それでも、たった一つ。

キモチワルくない、言葉がそこに存在していた。それは確かだった。

きゅううん、という音を立てて、心が鳴る。ああ、もう、だめだ。

先生、逢いたい。

思う前にもう、走り出してしまっていた。

走った、走った、走った—走った。

このまま、どこまででも行けそうな気がした。先生を探してどこまででも。

先生、先生、先生。

声にならない声がかすれた息になって吐き出される。

「・・・先生！」

あの、後姿があった。

「佐藤さん？」

怪訝な目でこちらを見る。ああ、やっぱり、好きだ。そう思った。

「・・・ノート」

それしか言うことができない。なんだか、涙が出てしまいそうで、声が震えた。

こんな私は、格好悪いだろうか。情けないだろうか。子供じみているだろうか・・・。

頭の中でそんな想いがぐるぐるぐるぐる、回り続けた。

それでも、これが私だった。

「ああ」

空気を察したように、先生が薄い唇を開く。細い目でこちらの様子を伺う。

「・・・嬉しかったです」

ちいさな声で、やっと呟いた。声に出してから、ああ、私は嬉しかったのか、と気づく。

「大丈夫なの？」

優しい口調に変わって、先生が問いかける。

一歩、近づく。慎重に。

先生に近付きたかった。ただ、それだけだった。

—もう夕方、薄暗い廊下に吹奏楽部のトランペットの音が響いている。

プオー、プオー・・・

なんだか間の抜けた音に少し安心してしまう。

「・・・大丈夫なんです」

もう一歩。私達の距離は20センチ。

「良かった」

先生が微笑む。口の、片端で。

もう、何て表現したらいいのか、・・・私は本当に、先生のことが好きなんだ。

思った瞬間だった。

どちらからということもなく、私たちの唇が触れ合った。

かすれた音を立てて。何かを、誰かを呼ぶようにして。

体中が熱くなった。芯が溶けてしまいそうだった。こんなに熱いものをキスと呼ぶのは、あまりに軽薄すぎるんじゃないか。

何秒間か、見つめ合った。先生は、目に困惑の色を浮かべている。
そんなの、知ったこっちゃなかった。
それでも先生は、その後、足早にその場を去った。

小さな声で「すみません」と言うのが聞こえたけど、誰が言ったものであるのかは分からなかった。

あの日

・・・どうして日本では、キスは挨拶では無いんだろう。

次の日の古典の自習時間。私はそんな、どうしようもないことを考えていた。

昨日のあの瞬間。どうしてあんなってしまったのか。漸近線でも、交わることがあるらしい。考えてみれば可笑しな話だ。アメリカなら、きっと、Nice to meet you! とかって、キスをしても何にも『マズい』ことにはならないのに。

どうして私たちは、キスをしたらいけないの？

『先生』と『生徒』の間の壁を無くそう！とか言ったのは誰だよ。壁、まだ残ってるじゃん・・・。

本当に、どうしようもない。

あの下手なトランペットの音色くらいどうしようもない。

思えば去年付き合ってた彼氏とは、キスでも何でも、しても罪にはならなかった。

あれはどれだけ幸せなことだったんだろう、と、今になって気づく。

そうだ、物事の大切さは、大抵それが過ぎてから解るんだ。大人になるに従って、そんな当たり前のことも忘れかけてる私たちには、たまにはこういう『振り返り』が必要なんじゃないかと思う。

付き合い始めて四日でキスをした。

キスをする前に手をつないだ。

抱き締め合った。もう、数え切れないほど。

笑い合って、喧嘩もして、毎日メールして。

(でも、電話は二人とも苦手だったからしなかった。)

何でも言える仲になって、落ち着く仲になって。

そして、初めてのエッチをした。

時間をかけて、ゆっくりと。

緊張と、嬉しさと、恥ずかしさとでぐちゃぐちゃになった想いを—
全部あの人に委ねた。

あのときの微かな痛みとか、高揚感、心地よく溺れていくような感覚—

それらは、私たちが子供同士だったからこそ起こったものだったのだろうか？

立場が違えば、状況も変わっていたのだろうか？

彼がもし、先生だったら—

・・・でも。少なくとも、私の気持ちの高揚感は、劣らない。絶対に。

まだ感覚が残ってる。あの薄い唇の。

冷静に状況を分析してみよう、なんて思ってみたけど到底無理だった。

もう一度触れたい。

汗で少し湿ったカットソーシャツに触れてみたい。

あの黒髪に、手を通したい。

そして、もう一度、キスをする。今度は、もっとゆっくりと。

・・・そうだな、あのプォー、プォー、に、合わせても面白いかもしれない。

初夏

結局その日は数学の授業はなく、私の心は悶々としたままだった。

週に6回もある数学。なのに、どうしてこんな時に限って無いんだろう、と一人ごちる。

毎日、いろんな「どうして」に押しつぶされるようにして息をする私たち。そんな問い達は、集まって、一体何処へ向かうんだろうか—

もう、世間は夏に近付いていた。期末試験が終わり、校内はなんとなく浮き足立っている。

ジィィィーッ。蝉の鳴き声が日に日に大きくなっていく校内を出た後。

学校から駅までの道のりで、熱い太陽の日差しが私を刺す。

「沙裕未」

聞き慣れた声が背後から聞こえる。やっぱり、裕希だった。

「・・・暑いね」

私がそっと話しかける。最近、進路の話題は避けていた。

「まあ、夏だしね」

クールな裕希。私の好きな声のトーンだった。

「ねえ、沙裕未」

「ん？」

「沙裕未さあ、今、楽しい？」

突然どうしたんだろう。考える暇もなく、祐希は繰り返した。

「沙裕未は楽しいの？」

楽しいか、どうか。私はそこで考えた。楽しい、って、どういうことなんだろう？そもそも。

「楽しいか、楽しくないかって言ったら、楽しいかな・・・」

そう。いつの間にか私たちは、『楽しさ』に相対性を見出すようになっていたのだ。

『楽しくない』か、『楽しくないこともない』か。

楽しくないときに比べたら、今は楽しい、とか。

何でも相対的な判断をする。

小さいころ、お母さんが、「美香ちゃんを見習いなさい！」なんて、言ってたのと同じように。

（美香ちゃん、は、よく覚えていないがとにかくオールマイティーな女の子だったという記憶がある）

昔はそんなお母さんが、学校の先生が、そんな大人が、嫌いだった私だが—いつの間にか私自身が『そんな大人』になりつつあったのだ。

気をつけなければいけない。いつでも気をつけて、そんな悪い芽は摘み取らなくてはならない。

「・・・裕希はどうなの？」

慎重に問いかけた。

祐希はふっと笑って、

「一番楽しく無い時よりかは楽しいかな」

と答えた。私はそっか、と頷いて遠い空を仰ぐ。

あーあ、と、思った。

子供のままでいられる訳などないのだ。

だからこそ「思春期」だとか、「過渡期」だとか、そういうものがあるのだ。

(大人になってもそんな時期を満喫する奴等がいるのは置いておいて—)

それだからこそ、今の教育課程が意味を持つ・・・。

あーあ、と、思った。

きっといつかは、挨拶としてキスでも交わすようになるのだろう。

こんな、グローバル化が流行りの、つまらない日本でも。

待ちに待った数学のある日。

その日の私は朝から非常に上機嫌、スキップでもし出しそうな勢いだった。

「沙裕未、どしたの？」

色々な人に訊かれた。でも私は、笑って見せるだけ。人に話すことができるような内容ではなかった。

裕希はそんな私を横目で見て、クスッと笑うだけ。コイツには、どんな言い訳をしても無駄なんだろうなあ、と思う。

数学は2時限目だった。いつも通りの選択教室。

私たちは彼が入ってくるのを待った。私の心臓の高鳴りと言ったらもう・・・すごかった。

ガララララッ。

「よーし、じゃあ授業始めるぞー！」

彼のものとは似ても似つかない、下品な声。顔を上げる。

そこにはもちろん、彼は居なかった。

「吉田先生！」

クラス全員が彼を注視する。・・・なんだ、お前か。

私のモチベーションやらテンションやら、全てがだだ下がりになったところで授業が始まった。

どうやら、

「藤間先生は教員採用試験に行かれたので、今日は皆で応援しながら授業しよう！な！」

・・・らしい。後半は特に不要だった気もするが。

私はそれを聞くなり机に突っ伏して、自分の世界に浸る準備をした。彼が居ない数学なんて、私にとって意味の無いものベスト5に入る。（最近、自分の中でランキングを作るのにハマっているのだ）

どうしてだろう。いつの間に私はこんなにも彼を求め始めていたんだろう。

初めて彼に会ったときの、「うわあ・・・頼りなさそう」なんて印象も、全部上書きされていて。

まるで初めから彼のことが好きみたいな。そんな錯覚さえ起こしそうになってしまう。

あれからずっと、考えないようにしてきたキスのことも。

私は彼とキスがしたかったのだろうか—

そんな獣のような感情だったのだろうか。

ノートに書かれたあのメッセージを見てそんな衝動に駆られたのだから、その結果は必ず美しいものだと、私は勘違いをしていたのだろうか。

その時、突然頭頂部に痛みが走った。鋭い効果音と共に。

「おい、佐藤！寝るな」

「は・・・はい」

仕方が無く起き上がる。寝てなどいない。

しかし私は大人しく頷いて、ノートをとり始める。処世術ってやつだろうか。逆らい続けることに何の意味も無いことには、ずっと前から気がついていて。

不自然に静かな教室の湿気た匂い。

窓の外では蝉がけたたましく鳴いている。

もうすぐ夏休みが始まるのだ。

この夏は、どこへ行こうか。

このどうしようもなく浮遊した想いを連れて、どこへ行ったらいいというのだろうか。

友情

それから少し経って、遂に終業式の日がやってきた。

藤間先生はというと、あの次の授業には現れて、そつなく授業をこなして帰っていただけだった。

何を期待していたというのだろうか・・・私はそれに不満を覚え、それでもどうしようもない気がして、なんだかやけにイライラしたのだった。

きっとあの日は何もなかったんだ。

小さい頃から物わかりがいいと褒められてきた私は、そう思うことにした。それが上手く生きていく秘訣なんだと、気がついたのは中学生のときだ。

うん、やっぱりそうだ、疲れていて夢でも見たんだ・・・。

そんな科学的根拠も何もない考えで納得した。するしかなかった。

大人になるにつれてこんなことは増えていくものだ、と割り切って、これから始まる夏休みを満喫するのが一番良い。

ふと気がつくのと、目の前に誰かが立っていた。

「沙裕未、何ぼ一ーっとしてんの？」

裕希が怪訝な目で私を見つめている。私は何か答えようとして、周りの音に圧倒された。終業式の朝は皆だらけていて、教室は果てないお喋りの声で混沌としている。まさに『カオス状態』。

「もう、夏休みだな一って思ってさ」

「まあ、夏だからねえ」

即効かつクールな返し。そんな適当に返すくらいなら訊くなよ、と心の中でなじる。少しだけ沈黙が続いた。

「裕希はどこか行くの？」

適当な問いだった。よくあるお喋り・・・女子高生の会話なんてこんなものだろう、とも思うのだが。

「あー、ドライブとか・・・かな、うん」

少し曖昧に言葉を濁す。意味深だ。

「え、誰と？」

訊くと裕希はフツと笑って、それからは何も言わなかった。

訊くべきでは無かったかもしれない、と少し後悔する。

裕希と恋愛の話をしたことは無い。

と、いうよりも私の好きな人は誰にも秘密だし、裕希はそんなことに興味も見せなかったし・・・
・今までは、裕希に恋愛なんて似合わない決めつけてしまっていた。

彼氏がいるんだろうか。

気になったけど、余計な詮索をすると裕希が機嫌を損ねることぐらいは察しがついた。

それにしても、裕希に彼氏かあ・・・少し感慨深いものがある。こんなにクールな裕希が、その人の前ではきっと甘えてみせるんだろう。ちょっと羨ましくもある。

目の前の裕希は目を遠くにやっただけ、何を考えているのだろうか、ゆっくりと瞬きをしていた

。なんだかその横顔がすごく綺麗で見とれてしまう。

大人と付き合っているんだ、きっと。

またまた決めつけてしまったけど、きっとこれは当たっている。100%と言ってもいいくらい

。

そう思ってから私は裕希から視線を外し、少し怖くなるくらい真っ青な空に目を向けた。

夏休みがくる。高校生になってから、2度目の夏休み。

・・・私たちはまだ、子供なのだ。

大人という単語を口にして初めて、そのことを実感するのだった。

その日の午前中は『退屈』そのものだった。

終業式では校長先生のお決まりの長い話。立ったまま寝ている生徒が大勢いて感心する。こういう機会にそんな技を身に着けておくべきなのかもしれない、と本気で思った。私にはそんな器用なことは出来ず、かといって真面目に話を聞くつもりもさらさら無かった。

そんな私の目に否応なく入ってくるのは裕希の姿。また、どこか遠くを見ているようだ。そしてそれを見つめる私。何かの三角関係みたいだな、と思って目をそらす。

その後は掃除。それからHR。

学校なんていうのは、授業が無かったら来る意味なんてほとんど無いんじゃないだろうか。山口の話聞き流しながら思う。ちょうど教室の中央に位置する私の席では、居眠りはご法度だった。

また腕なんか掴まれた日には、私の人生が終わってしまうんじゃないか。そんなことさえ思った。

「まあ、お前らには夏休みなんて無いからなあー。来年もな。でもなあ、大学に入ったら夏休みなんて逆にあり過ぎるくらいだぞ。今は我慢だ。なっ」

何事かと思うくらい大きい声で言う。もう何度も聞いた話だ。

実際私たちには夏休みがほとんどない。

部活はもとより、夏期講座なるものでほとんど毎日学校に来なくてはならないのだ。

それに加えて尋常じゃないほどの宿題。

夏休みという言葉は甘く聞こえるが、なんだか砂糖と塩を間違えて舐めたような気分になる。

来年はきっと、もっと短いだろうなあ・・・と漠然と思った。

まだ想像もつかない。志望校さえ決めていない私に想像がつくはずも無いのだが。

しかし、今よりはまだマシなんじゃないか、という甘い期待もあった。

一刻も早く高校を卒業してしまいたい私の場合、その期待の方が大きいと言っても間違いではない。

まだ鳴り響く山口の声の中、静かに目を閉じる。

未来のことを考えるために。

未来って言うのは、「未だ」「来ていない」ことなわけだから、今考えても意味が無い。

私はずっとそう思ってきた。

数学的帰納法みたいに、仮定したことを利用して何かできるわけでもない。
だから考えない方がマシだ、と。

しかし今までとは状況が変わりつつある。
未来を、将来を、視野に入れるべき時が来てしまったのだ。

何になりたい、何がしたい。

しかもそれだけではない。

そうなる為には何をすべきか—

そんなことまで考えなくてはならない。

私はため息を吐いた。
スイカになら、塩をかけても美味しく食べることが出来る。
だが、人生に塩をぶっかけられたら堪らない。

しかしそうやって、子供は大人になっていくのだろう。

ライブラリ

今日は夏休み初日。

土曜日だ。天気も良い。

こんな日は、自転車やら徒歩やらで、図書館などに行きたくなる。

(こんな女子高生は珍しいのだろうか、休日の図書館には同年代の女子が少ないように思えてならない)

だが今日はそこを我慢して、さっそく大量の課題に取り掛かろう、とノートを広げたのだ。

それからもう、1時間。

一向に進んでいない。むしろ後退している。

というのは、今やろうとしているものが数学の課題だからである。

解こう、解こうとはしているものの、その気持ちとは裏腹に手は動かなかった。もちろん頭も。完全に意識は明後日の方角を向いている。

もちろん考えているのは彼のことだ。

なんとなく有耶無耶にしたままで、だけど捨てきれない感情がそこにあった。

もう少し大人になりたいものだ。

キスの1つくらい笑って受け流すことができるような大人に。

でもそれは『大人』なんだろうか。

一見、澄ましている大人だって頭の中では何を考えているのかわからない。

幼稚園児のほうがよっぽど、『受け流して』いるのではないか……。

—もう、やだ。

頭の中を渦巻くそんな問いに耐えることができなくなって、私は遂に当初の意志を曲げた。こんな時には小説でも読んで、現実から離れるのが一番だ。

急いで支度を済ませて、携帯電話をポケットに入れようとしたとき。

ぶるぶる、という振動と共にメールが届いた。

『Eメール受信 祐希』

待ち受け画面に流れるピンク色の文字。

躊躇い無くメールを開いた。

『おはよー。夏休み、あけましておめでとう。今日、暇？』

なんだかマヌケな文章に少しホッとす。祐希は絵文字を打たない。(私もだが)しかしそんな真っ黒い文章でもクスッと笑えるというのはどういうことなんだろう。

『ひまひま。どうした？』

数秒でその文字を打ち込む。
するとまた、数秒後に返信が届く。

『ちょっと話聞いてくれないかい？』

『いいよー。どこで？』

『私ん家でどう？』

了解、とまた打ち込む。なんて事務的な内容だろう。だけどこんなやり取りが、私は好きだった。
行き先を変えたことで少し気分が明るくなった。こういう意外な展開も嫌いじゃない。

行ってきます、と言って2駅離れた祐希の家へ向かう。
ドアを開けた瞬間、弾けるような蝉の鳴き声に包まれた。

ぬるい風の中、颯爽と歩く私は周りからどう見えるだろう。
歩きながら、そんなことを考えてみる。

マリッジ

家から駅まで、徒歩5分。そこから裕希の家の最寄り駅まで電車で10分。

蒸し暑い電車の中、私はくすんだクリーム色の壁にもたれかかって外を見ていた。裕希の『話』を想像してみる。恋愛のことだろうか……。なんだか昨日から、そのことが心に引っ掛かっている。詮索は、したくない。しかしやはり友達たるもの、そういう事情を知っておかなければならない—気がするのだ。

電車を降りると、駅では裕希が待っていた。薄手のTシャツに、ショートパンツ。腕にはビタミンカラーのバングル。夏らしくて可愛いな、と思った。

「ごめん、待った？」
「ちょっと。まあ、暑いところ来てもらったんだし……。それ位はね」

ニコッと笑う裕希が妙に可愛らしくて、なんとなく目を背けた。二人で並んで歩き出す。私は少ししてから話し始めた。

「どうしたの？今日は」
「うん、ちょっとね……」

曖昧に笑う。何かありそうだ。裕希はバングルをくるくると回しながら、下を向いた。

それからはもう、何も言わなかった。二人とも。黙々と歩いた。たまに汗を拭いながら—もうすぐ裕希の家。『SAKAMOTO』と書かれた表札が太陽の光を受けてキラキラと輝いていた。

「親ともめてるんだよね」
ようやく口を開いたかと思えば、それは恋愛の話とはかけ離れていた。
「え、私、来てよかったのかな」
「来て欲しかったの」

その台詞に少しきゅん、となる。女子からそんなことを言われて、こんなに嬉しいとは思わなかった。相手が裕希だから、だろうか。

チリンチリン……

ドアに吊るされた風鈴が鳴る。風も無く、しかしひんやりとした玄関の匂い。私たちは順番に靴

を脱いで並べた。

お邪魔します、と私が言うと奥から裕希のお母さん、『美里さん』が出てきた。

「さゆちゃん、いらっしゃい！」私の目を真っ直ぐ見て笑顔のまま言う彼女に、私もまた同じように「こんにちは」と返した。

裕希はそんな二人をチラリと見て、私の手を引っ張った。私はそれに逆らうことも無く、美里さんに苦笑いをする。

部屋に入るなり、裕希は私の手をパッと離してベッドにダイブした。

ぼすっ、と鈍い音を立てて布団がへこむ。

「あーあ」

私に目を向けて裕希が始める。

「あいつ、沙裕未には優しいんだよ。実の娘より」

当たり前じゃないか。と思いつつも、そんなこと無いって・・・と、おどけて見せた。うちの親も、外面だけは良い。だけど内面だけ良いよりも大分マシだ。

しかし今の裕希にそんなことを考える余地は無いらしく、私から目をそらして天井を見上げている。

「ねえ、進路決めた？」

意外な一言。そこでまた、裕希と私の視線が一致する。

「・・・裕希は？」

「答えになってない」

私の問いかけを一蹴してから、裕希は起き上がってベッドの上に座り直した。私にも、座りなよ、と手で合図をする。

「私は・・・一応、決めたよ」

遠慮がちに答えると、裕希はまたまた意外にもニヤッと笑った。

「まあ、沙裕未はそうだろうなって思った」

とげのある言い方。ちくり、と私の心を刺すようだ。

「・・・裕希は」

私が発する空気を察したのか、裕希は真面目な顔をして言う。

「決めた」

私は裕希の顔をまじまじと見つめた。すごくはっきりとした言葉だった。

「どうすることにしたの？」

気になって訊く。すると裕希はまたもやニヤッと笑って答えた。

「結婚する」

え？と、言う声も出なかった。ただ裕希の顔を見つめた。

しかしその顔には一点の曇りも無く、冗談だとは思って首をかしげる。

しばらくは言葉を発することも、何かを考えることも出来なかった。

それなのに頭の片隅で、

『費用はどうするんだろう？』

という現実的なんだか夢見がちなんだか分からないような問いが、浮かんでは消えていくのだった。

言い訳

返す言葉なんて見つからなかった。

非現実的な言葉なのに何故か妙に現実味を帯びていて、胃液が喉の近くまで上がってくるような気がして唾を飲み込む。酸っぱくなくて、良かった。

それから随分と沈黙が続いて、やっと裕希が口を開いた。

「・・・本気にした？」

裕希の目尻がキュンと下がる。

私はをの言葉をどう受け止めていいのかわからないまま、曖昧な笑みを浮かべた。

「沙裕未は素直だね」

ベッドから立ち上がるギシッ、という音が部屋に響いた。

「・・・どういう意味？」

やっと出た言葉。口が渴いて、少しかすれた声だった。

「怒らないでよ」

裕紀が苦笑する。怒ってなんか、いない。

しかし彼女は続ける。驚くほど優しい声で。

「沙裕未は」

「籾間先生のこと、好きでしょ」

「・・・え」

声が漏れる。YESと言っているようなものだ。だけど隠す術も無かった。裕希なら、或いは気付いているのかもしれないという予想が無かった訳では無かった。

そんな私の様子に気付いてか、裕希は不敵な笑みを浮かべた。

「知ってるんだよ、全部」

「・・・へ？」

間抜けな声が出る。全部？って、何を？

「でも沙裕未は、私のこと知らないでしょ」

貧乏揺すりをしながら裕希が上目遣いでこちらを見る。

「沙裕未は、気付いてない」

私の手には、いつの間にか汗が滲んでいた。生暖かい汗。なんだか気持ちが悪くて服の裾で拭う。

裕希の言っていることの意味が解らなかった。何を意味しているんだろう、とその目を見上げてみても、私の視線はいつも容易くかわされてしまって—

行き場を失ったやりにくさが、部屋に充満しているようだった。

呼吸が出来なくなりそうで、慌てて大きく息を吸う。

「・・・何の話をしてるの？」

意を決して出した言葉。自分があまりに馬鹿みたいで笑えそうだった。

裕希はふと動きを止めて、机の引き出しを静かに開けた。

取り出したものは、アルバム。ちょうど掌に乗るくらいの、小さな物だった。

それを私に持たせる。

私は、「見ていい？」と訊くように裕希の顔を見る。彼女は頷いた。

パラパラ、と、ビニールが擦れる音がした。

それに挿まれている、写真。

私は、また言葉を失った。というより、目を疑った—

そこに写っていたのは、あの担任の、下品な笑顔だったのだ。